国語科学習指導案

指導者　　釼持ゆか

１．日時　　平成１８年１０月２４日（火）　２校時

２．単元名　　詩を楽しもう
「ぼく」（木村信子作）
「わたしたちも」(木村信子作)

３．単元目標　　作者のものの見方や考え方について感想を持ち、詩を読む楽しさを味わうことができる。
〇言葉の持つ意味に興味を持ち、自分の考えを伝えようとしている。（関心）
〇言葉の意味や情景を想像しながら読み、作者が伝えたかったことを考えることができる。（読むこと）
〇情景をイメージし、表現を工夫して声に出して読むことができる。（読むこと）

４．ひびき合うこども達をめざすための指導の工夫
（１） 単元と指導について
本教材の詩「ぼく」の前半部分は、「ぼくは、地球上の何十億人の中の、それこそ数として実感できないほどの小さい存在だ。」という分かりやすい内容である。
しかし、後半部分の「ぼくという　宇宙なんだ」という表現は、児童にとって理解するには、やや難しいと思われる。小さな小さな存在である「ぼく」が「宇宙」と同じである。児童の疑問は、そこに集中されると思われる。
「ぼくという　宇宙なんだ」という表現は、次のように解釈できる。人は、６０兆の細胞からなるという。この一つ一つの細胞が、それぞれの場所でそれぞれの働きをし、さらにＤＮＡによって自らを複製して日々入れ替わっているという。このような人体の神秘的なしくみは、ミクロコスモスと言われ、人は、自分の内部に宇宙に匹敵するほどのものを抱えていると言える。つまり、小さな小さな「ぼく」であってもその生命は、宇宙と同じでありかけがいのない存在である。そして、宇宙は、誰の中にも存在し、誰にも生きる価値があり、尊重されあって生きなければならないと言える。
この詩の表現の特徴は、話者である「ぼくを見ているぼく」が、視点を移動させることにより「ぼく」の見え方の変化の面白さがあげられる。視点の位置がクラスの中、学校の中、地球の中と広がっていくのと対照に「ぼく」の存在は、どんどん小さくなっていき、最後に「これ　ぜんぶ　ぼくなんだ」と一気にアップされる巧みな構成である。そして、「ぼく」がどんどん小さくなっていく様子を表すのに「たった」「たった　たった」という繰り返しの言葉による強調があげられる。また、「の　ぼく」「これ　ぜんぶ」のように一字空きによってリズムを作り、空欄にした部分の作者の思いを想像することができる。

（知的好奇心）

①　本教材の後半の表現そのものが、児童の知的好奇心を揺さぶるものと思われる。難しい言葉や漢字もなく、どの子にも読みやすい詩で、読めることは読めるだろうが、作者が何を伝えようとしているのかよく分からない、難しいと感じる児童も多いだろう。「よく分からない詩が分かるようになった、言葉からいろいろと想像できて面白いな。」皆と話し合う中で『ちょっと難しかった』が、『内容が分かった』に変わることによって知的好奇心が引き出されたことになるのではないかと思う。

○　前時に「宇宙」という言葉から想像を広げる。

「ぼく」の詩が意味する「宇宙」は、「ぼく」の中に内在する「宇宙」そのものであるが、児童がそのように解釈することは、難しいと思われる。しかし、「宇宙空間の宇宙」のイメージを広げておくことによって、「ぼくという　宇宙なんだ」を考える手がかりになるのではないかと思う。

○　言葉の持つ意味をイメージする。

見えてきたこと（様子）、心に感じたこと、言葉のよさ、友達の意見を聞きたいこと、作者の思いについて行間に書き込みをさせる。それぞれの児童が、直間的に持った感想やイメージを言葉や印で表すようにする。書き込むことで興味を持っているところやこだわっている部分を子ども自身が確かめることができると思われる。書き込みが進まない児童に対しては、「ぼく」がどんな存在であるか感じ取らせるために、「カメラマンになったつもりで、ぼくをさがしてみよう。」と声をかけたり、着目させたい言葉を教師のほうで投げかけたりしていきたい。

②　同一作者の「わたしたちも」の詩を「ぼく」の学習の後に紹介する

「ぼく」を通して作者の思いを感じ取った後、紹介したい。作者の伝えたいことがストレートに表現されているので、「ぼく」と比べて分かりやすい詩とも言える。児童の中には、「ぼく」で感じ取った作者の思いが、この詩の４連と同じような内容になっている場合もあるであろう。反対に、前時に「ぼくという　宇宙なんだ」が十分にイメージできなかった場合は、作者の伝えたい思いが、「わたしたちも」に似ているのではないかと感じ取ることもありえるだろう。

技法については、「ぼくは、小さい」と書かなくても小ささを感じ取らせた「ぼく」の詩の表現効果を再確認することになると考える。２つの詩を比べることにより、技法による詩の面白さに気づくことができるであろう。

（関わり合い）

①　ペア対話

本時では、前時で書き込みした内容をもとにペアで交流する。ペア対話は、隣席の友達と２人チームで行う。このペア対話を通して、クラス全員の児童に実際に「話す」という活動が保証される。自分の考えを言葉を選びながら音声言語で表現し、仲間に伝え ,聞いてもらえるという体験が保証される。全体で交流する前に取り入れることにより、自分の考えに自信を持てたり、クラスの皆に伝えたいという意欲につながったりすると考える。また、全体の交流場面でも話し合いの内容によっては、適宜取り入れることによって、思考が活性化されると思われる。

ペア対話では、「話すこと・聞くこと」における話し方や聞き方等の指導内容はあるが、本時では、書き込みをした内容をもとに交流するので、話の内容を意識させ、言葉から受け取る感じ方の相違点や共通点を捉えさせていきたい。

② 全体交流

前半部分では、「たった　ひとり」「たった　たった　ひとり」「数にならないくらいの」の言葉からぼくの様子の変化を捉えさせたい。話者の視点の移動により、ぼくがどんどん小さく見えていき、小さな存在であることを想像させたい。後半の「ぼくという　宇宙なんだ」は、宇宙が表す意味を考えさせ、この詩を通して作者のどんな思いが伝わってくるかにつなげていきたい。児童が、「宇宙」からイメージする意味の捉えは、「無限、果てしなく広い、世界に一つだけしかない。かけがいのないもの。素晴らしいもの。」等小さなぼくに対して考えていれば良いと思う。

教師の読み、上記のように話し合いにおいて、立ち止まらせたい箇所はあるが、児童の発言からスタートさせていきたい。詩は、読解でなく感じるもの。言葉から感じたイメージ、思いを素直に表現させていきたい。話し合いでは、同じ言葉でも捉え方の違いがあることを感じ取らせたい。児童同士を関わらせるためには、言葉に反応させていくことが大切である。自分の考えのもとになった言葉に着目させ、意見が発言できるようにしていきたい。聞きっぱなしにするのではなく、自分の考えや思いと似ているか少し違うか、考えながら聞かせるようにしたい。発言の仕方としては、「～さんと似ていて」「～さんに付け加えて」「～さんと違って」等、関連した発言ができると良い。

（２） 指導計画（全３時間）

第１次

・　「ぼく」を読み、それぞれの読み方の違いに気づく。内容について個々で考える。（１）

・　「ぼく」を読み、内容について話し合う。（本時）

第２次

・　「わたしたちも」の詩を読む。「ぼく」で読み取ったことが表現できるように語る。（１）

５．本時

（１）本時の目標

言葉の意味や情景を想像しながら、個々の感じ取った内容を話し合うことを通して、作者の伝えたい思いを考えることができる。

（２）本時の展開

学習活動	指導上の留意点（◇評価）
１．　今日の学習内容について知る。 「ぼく」を読んで感じたことを話し合い、作者の伝えたかった思いについて考えていきましょう。 ２．「ぼく」を一人で音読する。（３回） ３．全体で音読する。 ４．　ペアー対話をする。 書き込みをして感じ取った内容について、隣の人と話し合いましょう。 ５．　全体で話し合う。 見えてきたこと（様子）、心に感じたこと、言葉のよさ、友達の意見を聞きたいことを出し合いましょう。	

・「クラス、学校、地球」と広がっていくとぼくは、どんどん小さくなっていく。 ・「たった　ひとり」「たった　たった　ひとり」からぼくが、小さくなっていく様子が見える。 ・「かずにならないくらいの」だから本当に小さく見える。 ・「たった　ひとり」から一人ぼっちで寂しい感じがした。 ・「ぼく」は、大事な一人に思える。 ・「これ」って何をさしているのかな？ ・「ぼくという　宇宙なんだ」のところがよく分からない。 ・「ぼく」は「宇宙」と同じで、かけがえのないもの。 ６．　作者の思いについて話し合う。 この詩を読んで作者のどんな思いが伝わってきましたか。 ・　ぼくは広大な宇宙と同じなんだ。ぼくたちもすごい力を持っているのだと発見した喜びを伝えようとしている。 ・世界に一つだけしかない宇宙。ぼくも世界に一つだけしかいない大切な一人なんだ。 ・ぼくは、小さい存在だけど宇宙と同じ無限の力があるのと 力強く言っている。 ７．学習の振り返りをする。 本時の感想をまとめましょう。	・自分の読み方で音読する。 ・「の　ぼく」「これ　ぜんぶ」等一字空けて書いてある箇所を意識させる。 ・書いた内容について、ペアー対話をする。 ◇進んで対話に取り組もうとしている。（関） ◇言葉から受け取る感じ方の相違点や共通点に気づくことができる。（読） ・ペアーで話し合ったことをもとに全体で交流する。 ・どの言葉から考えたのかはっきりさせる。 ・「ぼく」の存在は、小さいことを捉えさせる。 ・「ぼくという　宇宙」の意味について考えさせる。 ◇自分の考えを伝えようとしている。（関） ◇言葉に着目して、想像しながら読んでいる。（読） ・自分が捉えた「宇宙」のイメージをもとに考えさせる。 ・「ぼく　なんだ」の「なんだ」の音読の仕方も合わせて考えるようにさせる。 ・本時の感想をまとめる。

（３）本時の視点

言葉の意味や情景を想像しながら、個々の感じ取った内容を話し合うことを通して、作者の伝えたい思いを考えることができたか。